

# 国士館100周年創立記念祭

## 柔道部 (男子)

### 国士館大学柔道部の歩み

国士館大学柔道部の前身は、昭和4年創設の国士館専門学校(国漢・柔道科)にある。国士館専門学校は柔道、剣道、弓道など、武道の教員養成を目的として置かれていた。

戦前は、西の武専に対して東の国士館と謳われ、中でも柔道は著名な師範に加え、全日本柔道選手権大会を制した石川隆彦ら数多の名選手を輩出したことから国士館柔道の実力と名声は広く知られていた。しかし、こうして名を馳せた国士館柔道は、先の大戦で大きな打撃を受けることになる。終戦間近の昭和20年5月25日、東京山手地区を襲った大空襲は、ここ世田谷の国士館にも及び校舎の全てを焼失してしまっただけでなく、さらに戦後は連合国の占領政策により、武道そのものが禁止され、国士館教育における柱を失った専門学校は存続の危機に瀕した。ついには校名の変更まで命じられ、日本が昭和26年に独立を果たすまで、国士館は至徳学園と校名を変え継続を図ることを余儀なくされたのである。

国士館柔道が復活するのは、それから10年を経たことになる。昭和28年創設の国士館短期大学に昭和31年に三年制の体育科が設置され、ここに柔道部が誕生する。その後、短期大学体育科は昭和33年に体育学部へと改組転換され、短期大学体育科第1期生、即ち体育学部第1期生が大学柔道部の第1期生達であった。

当時の柔道部長には戦前の国士館専門学校時代から師範であった会田彦一八段(体育学部教授)、監督に同専門学校卒業で郷里青森から招聘された上野孫吉六段(体育学部講師)他指導陣には同専門学校の卒業生で今村寿六段らが加わった。

しかし、戦後の混乱で長らく伝承が途切れていた国士館柔道が実力と名声を取り戻すまでには更に長い歳月を必要としたのである。

この苦難の時代を、『負けてたまるか』という強い心と、先行する他大学に追いつき、追い越せの固い信念で精進を重ね、その成果が現れたのは創部から10年が経過したときであった。昭和40年全日本学生柔道優勝大会において、豊田貞三が無差別級で第3位、41年には同大会において田畑隆章が軽量級で優勝、そして、昭和46年、団体戦での東京学生優勝大会において第3位、同年の全日本学生優勝大会でも第3位に入賞、次いで昭和47年には全日本学生優勝大会で準優勝した。これらの活躍によって国士館柔道の復活の兆しが漸く見えてきたのである。この躍進の黎明期、柔道部長には上野孫吉七段(体育学部教授)監督には小山泰文六段(体育学部講師)が昭和46年から就任していた。

その後、柔道部は国際大会、世界大会に出場する多くの選手を育成し、昭和40年代後半には水信健が軽々量級、中村均が無差別級で世界学生選手権大会に出場、優勝を飾った。昭和49年、森脇保彦が世界学生選手権大会軽々量級で優勝、昭和51年には西田孝宏がスペインでの世界ジュニア柔道選手権大会70キロ級、昭和53年のブラジルでの世界学生選手権大会71キロ級を共に優勝している。こうして個人の活躍が続くなかで、森脇保彦は昭和56年のマストリヒトでの世界選手権大会60キロ級でも優勝している。この世界選手権獲得のあと、柔道部から次々と世界選手権覇者が生まれた。昭和58年には、モスクワでの世界選手権大会で斉藤仁が無差別級、日陰暢年が78キロ級で共に優勝し、昭和60年ソウルでの世界選手権大会では、日陰暢年が78キロ級で優勝して大会2連覇を果たした。この進展のなかで柔道部は、いよいよオリンピック選手を送り出すことになる。昭和59年、ロサンゼルス大会95キロ超級に斉藤仁が出場し優勝、次のソウル大会95キロ超級でも優勝した斉藤仁はオリンピック連覇の偉業を遂げたのである。

そして、国士館大学柔道部は平成8年、ついに念願であった全日本学生柔道優勝大会での団体優勝を遂げる。実に創部から40年目の快挙であった。その後も柔道部の隆盛は続き、平成11年、東京学生柔道優勝大会、全日本学生柔道優勝大会、全日本学生柔道体重別団体優勝大会の全てを優勝で飾る団体戦3冠の快挙を達成した。

その後の柔道部の活躍は団体、個人ともに目覚ましく、団体での優勝回数は東京学生柔道優勝大会(13回)、全日本学生柔道優勝大会(6回)、全日本学生柔道体重別団体優勝大会(4回)を果たしている。個人では、鈴木桂治の全日本柔道選手権大会での優勝(4回)世界柔道選手権大会優勝(2回)アテネオリンピックでの金メダル獲得は記憶に新しい。オリンピックでは他に、石井慧が北京大会100キロ級で金、西山将士がロンドン大会90キロ級で銅を獲得した。その他国際大会、世界学生選手権大会に吉永慎也、百瀬晃士らが出場、韓国水原での世界学生選手権大会73キロ級では成田泰宗が準優勝している。この輝かしい成果のなかで特筆したいことは、柔道界で最も歴史があり、日本の柔道家が最大の栄誉とし、憧れを抱く全日本柔道選手権を、斉藤仁を筆頭に、鈴木桂治、石井慧、高橋和彦、加藤博剛らが制し、柔道日本一の栄冠を獲得していることである。加えれば、これらの国士館大学柔道部出身者によって全日本選手権を永年にわたり連覇したことを挙げたい。

今、国士館大学柔道部は、その黎明期を故上野孫吉八段と共に支え、長く柔道部の監督、部長として、この発展に心血を注いだ小山泰文八段を師範に戴き、柔道部長森脇保彦(体育学部教授)、監督鈴木桂治(体育学部准教授)、そして指導陣には山内直人(体育学部准教授)吉永慎也(体育学部助教)百瀬晃士(国士館職員)成田泰宗(国士館職員)の強固な体制を整え、実力とともに心技体を備えた真の国士館柔道、世界に誇る柔道部の高見を目指して、新たな歩みを始めている。

### 戦績

#### 【団体戦】

『東京学生柔道優勝大会』	優勝 13回
『全日本学生柔道優勝大会』	優勝 6回
『全日本学生柔道体重別団体優勝大会』	優勝 4回

#### 【個人戦】

##### 『全日本柔道選手権大会』 優勝者

石川隆彦(1949年、1950年) 優勝 2回
斉藤 仁(1988年)
鈴木桂治(2004年、2005年、2007年、2011年) 優勝 4回
石井 慧(2006年、2008年) 優勝 2回
高橋和彦(2010年)
加藤博剛(2012年)

##### 『世界柔道選手権大会』 優勝者

森脇保彦(1981年:オランダ・マストリヒト)
日陰暢年(1983年:ソ連・モスクワ、1985年:韓国・ソウル) 優勝 2回
斉藤 仁(1983年:ソ連・モスクワ)
鈴木桂治(2003年:日本・大阪、2005年:エジプト・カイロ) 優勝 2回

##### 『オリンピック競技大会』 メダリスト

斉藤 仁(1984年:アメリカロサンゼルス・1988年:韓国ソウル) 優勝 2回
鈴木桂治(2004年:ギリシャアテネ) 優勝
石井 慧(2008年:中国北京) 優勝
西山将士(2012年:イギリスロンドン) 3位



第48回 全日本学生柔道優勝大会 優勝記念 H11.6.27

全日本学生柔道優勝大会 初優勝



斉藤仁  
全日本柔道選手権大会



全日本学生柔道体重別優勝大会 初優勝



鈴木桂治監督就任会見



平成28年度全日本学生柔道体重別優勝大会(2016年10月29日30日)



斉藤仁・鈴木桂治  
アテネオリンピック金メダル凱旋パレード